

# 飢餓海峡

—— 映画文学人生論

原作：水上勉 (1963年) 「朝日新聞」  
監督：内田吐夢 (1965)  
出演：犬飼多吉 三国連太郎 脚本：鈴木尚之  
杉戸八重 左幸子 撮影：仲沢半次郎  
弓坂刑事 伴淳三郎 音楽：富田勲  
味村刑事 高倉健

ちがうううこの人犬飼さんだわ！

山本周五郎『青べか物語』のおせいちゃんは小料理屋「澄川」の娘である。年の頃は二十歳くらい、ほそおもてのきりようよしで、蒸気河岸の先生とは近所づきあいの仲だった。

川島雄三監督の映画『青べか物語』では左幸子が演じている。先生が相手にしてくれないので、他の男と偽心中事件を引き起こし、先生が青べか村から逃げ出すきっかけをつくった悪女ということになっているが、原作ではそんなことはない。先生は「澄川」のような小料理屋（ごったく屋と呼ばれる）で働く女たちのカモにはならなかった。彼女たちがどのようなカモの客たちに金を使わせるかという手口をおせいちゃんから聞いて、原稿のネタにしているだけだ。

「ごったく屋の女と呼ばれる彼女たちが、みな神のごとく無知であり単純であり、絶えず誰かに騙（だま）されて苦勞しているながら、その苦勞からぬけだすとすぐにまた騙されるといふ、朴訥（ぼくとつ）そのもののような女性であることがわかった」などと書いている。

そんな聖なる娼婦を左幸子が見事に演じたのは水上勉原作、内田吐夢監督の『飢餓海峡』だ。

昭和二十二年九月二十一日、青函連絡船層雲丸（洞爺丸）が遭難した。船客五百三十名の命が奪われたが、死体収容にあたった函館警察の刑事弓坂（伴淳三郎）は、引取り手のない二つの死体に



## 飢餓海峡

映画文学人生論

疑惑を感じた。船客名簿にもない死体はどこか別の場所から運ばれてきたにちがいない。

ベテラン刑事の直観は正しかった。その前日、北海道岩内で質店一家が惨殺され、犯人は放火して、逃亡した。網走刑務所を出所したばかりの二人と大男の犬飼多吉（三国連太郎）の三人組による犯行だ。そして、仲間割れした三人組のうちの二人の死体が青函連絡船遭難の犠牲者の中にまぎれこんだというのが真相である。

刑事は犬飼の足跡を追って、下北半島の温泉へ行き、そこで杉戸八重（左幸子）から犬飼容疑者の消息を聞く。八重はあいまい宿「花屋」で働く酌婦で、犬飼と一夜をともし、質店から強奪した約八十万円のうち三万四千円を貰っている。

その事実を八重は刑事に伝えなかった。神のごとく無知で単純な表情でウソを言ったのだ。聖なる娼婦の迫真の演技に疑い深い刑事も「この女が嘘をつくはずがない」とだまされてしまった。

十年後、八重は樽見京一郎という食品会社社長が刑余更生事業資金に三千万寄贈したという写真入りの新聞記事を見て、舞鶴へ行く。「ちがううゝこの人犬飼さんだわ」。八重にとって犬飼は恩人である。一目逢ってお礼をいいたかった。

数日後、八重の死体が舞鶴で発見された。真相隠蔽のために消されてしまったのである。

飢餓海峡渡れば宿に聖娼婦